

2024年度 入試問題

一 次

国 語

注意

- この冊子は17ページまであります。
- 問題は□から□までです。
- 解答用紙は冊子の中ほどにはさみこまれています。
- 時間は50分です。
- 解答はすべて解答用紙にていねいに書いてください。
- 記述は解答欄^{らん}内に収めてください。一行の欄に二行以上書いた場合は、無効とします。
- 解答用紙のみ回収します。

渋谷教育学園
幕張中学校

【A】 完全な計画が不可能だとすれば、少なくともある程度は、その場で対処していくしかない。その場の状況を見ながら、その場で考え、その場でどうするかを決める。その場で考えていては間に合わないこともあるから、そのようなことについては、あらかじめ計画を立てる必要がある。しかし、その場で考えても間に合うことは、その場で対処すればよい。たとえば、複雑な迷路のようになった地下鉄の駅に初めて行くときは、あらかじめ地図を見て出口を調べておいたほうがよいだろうが、初めてでないときは、事前に調べなくても、たいていそれほど迷わずに出口を見つけることができる。

どのような状況になるのかがよくわからないときに計画を立てるのは、起こりうるさまざまな状況を想定しなければならないから、本当にたいへんである。それぞれの状況のもとでいちいちどうするかを決めていかなければならないので、その計画は複雑かつ膨大なものとなる。しかも、想定した状況のほとんどはじつさいには起こらないから、せっかく立てた計画も、その大部分は活用されず、無駄となる。

そうだとすれば、むしろ計画を立てず、その場で対処するほうがよいのではないだろうか。たしかに事前の計画が必要な場合もあるが、積極的にその場の対処に任せるほうがかえって効率がよいことも多い。

このような考えにもとづいて最近よく用いられるようになった言葉が「アジャイル (agile)」である。この言葉は、辞書的には「機敏な」とか「身軽な」を意味するが、コンピュータのソフトウェアの開発において、従来とは異なる新しい開発手法を表すのに用いられるようになった。すなわち、ソフトウェアを開発するさいに、初めからすべての^(a)「コウテイ」にかんして綿密な計画を立てるのではなく、まずは小さな単位で試しながら、試行と修正を繰り返してソフトウェアの全体を完成させていくという手法である。

このソフトウェアの開発における用法が拡張されて、「アジャイル」という言葉は、いまでは行動一般にかんして用いられるようになった。

すなわち、何らかの行動をしようとするとき、事前にきちんと計画するのではなく、進行中のその時々状況に応じて適当にどうするかを決め、うまく行かなければ修正を行うといったことを繰り返して、行動全体を完遂するというやり方が「アジャイル」とよばれるようになったのである。

仕事の打合せのなかで「アジャイルで行こう」と言われた場合、それはようするにその場でやりくりしようという意味である。

私たちはついつい、しっかりした計画を立てて、絶対に失敗しないようにすべきだと考えがちであるが、そのような緻密な計画を立てることは、実際上ほとんど不可能であるか、あるいは^①きわめて効率が悪い。緻密な計画にこだわるのは、失敗にたいする「病的な恐怖」によるところが大きい。

たとえば、恐ろしくて飛行機に乗れない人がたまにいる。そのような人は飛行機の安全性を十分理解していても、飛行機に乗るのを恐れる。たしかに危険な状況で恐怖を抱くのは適切であり、それは逃げるといった行動を引き起こして、じつさいに害を^(b)被ることを防いでくれる。しかし、危険でない状況で恐怖を抱くのは不適切である。それは害の未然の防止に役立たないどころか、有益な行動を妨げもする。飛行機への恐怖は、このような病的な恐怖である。

最近、「正しく恐れよ」とよく言われる。放射能に汚染された食品であっても、汚染度は低く、健康に影響はないのに、恐ろしくて食べられない人がいる。このような人は、危険度に見合った「正しい恐れ」ではなく、それに見合わない病的な恐怖を抱いているのである。

緻密な計画へのこだわりも、失敗への病的な恐怖に支配されている可能性が高い。緻密な計画を立てなくても、アジャイルでやっつけば、失敗することはほばないにもかかわらず、失敗を恐れて、可能なかぎり緻密な計画を立てようとする。たとえ計画を立てるのが無駄であり、その場で適当にやっつてもうまくやれるということを頭でよく理解していても、どうしても失敗への恐怖がなくなる。こうして計画を立てずにはいられないのである。

アジャイルで行くことは、一見、いい加減で、行き当たりばったりのようにみえるかもしれないが、計画を立てるよりも、

アジャイルで行くほうが効率的で、成功する確率が高い場合もある。だからこそ、アジャイルで行くのである。私たちがアジャイルではなく、しっかりした計画に向かいがちなのは、アジャイルがいい加減で失敗の可能性が高いからではなく、むしろ失敗への病的な恐怖があるからである。あえてアジャイルで行くことは、^② **そのような病的な恐怖の克服にもつながる。**

もちろん、アジャイルが重要だと言っても、計画がいつさい無用だというわけではない。過度に緻密な計画は無用だが、適度な計画は効率の面でも、成功率の面でも、重要である。結局、適度な計画を立て、あとはその場のやりくりに任せることが大切だ。つまり、計画とアジャイルの適切なバランスが何と言っても重要なのである。

【B】 アジャイルでやっていくには、その場の状況に応じて的確に対処する能力、つまり **③ 臨機応変の能力** がなければならない。ヒーローはたいていこの能力に秀でている。『007』のジェームズ・ボンドは、ビルの屋上や水上などでじつにスリリングな戦いを見せるが、どんなに窮地に陥っても、手持ちの小道具やその場にある物を巧みに利用して、きわどく危機を脱していく。そんなに都合よく小道具や物があるわけないだろうと思いつつも、俊敏な対応能力に感心させられる。

このような臨機応変の能力は身体知の一種である。それは身体で覚えた知であり、脳だけではなく、身体にも刻みこまれた知である。ただし、身体知のすべてが臨機応変の能力だというわけではない。たとえば、舗装した道路でしか自転車に乗れないとしても、でこぼこ道でも、それらに対応してうまく自転車に乗ることができてはじめて、臨機応変の能力をもっているとは言えない。砂利道でも、芝生の上のような臨機応変の能力は、身体知のなかでも、多様な状況に対応できるようなタイプの身体知、すなわち「多面的身体知」なのである。

私たちは、ボンドには遠く及ばないにせよ、多少なりとも、このような多面的身体知をもっている。混雑した駅では、いろいろな人とさまざまな仕方であつかりそうになるが、たいていうまくよけることができる。会社にいけば、上司や同僚など、さまざま

な人から挨拶されるが、相手に応じて適切に挨拶を返すことができる。このような多面的身体知をほとんど無意識的に行使すること、私たちの日々の生活は成り立っている。

ところで、臨機応変の能力には、このように状況に応じて適切に「行動する」能力だけではなく、状況に応じて適切に「考える」能力も含まれる。こちらは身体を動かす能力ではないので、身体知ではないが、臨機応変の能力のひとつである。

たとえば、紅葉の季節に「そうだ、京都に行こう」と思い立ち、家を出る。計画と言っても、新幹線で行くというきわめておおまかな計画しか立てていない。駅に着いて、自由席にするか、それとも指定席にするか考える。混み具合を調べてみると、自由席は座れないようだが、指定席は一時間後にしか空いていない。早く行きたい。まあ、座れなくてもいいかと思って、自由席の切符を買う。

こんな調子で、その場、その場で、適当に考えて、やりくりしていく。そうすれば、たいした計画を立てなくても、無事に京都にたどりつける。ここでは、状況に応じて適切に考えるという臨機応変の能力が大きく物を言う。

【C】 その場の状況に応じて考える能力も、行動する能力と同じく、訓練や実地経験によって鍛えることができる。人によって臨機応変の思考能力に違いがあるのも、生まれつきの素質の違いもあるだろうが、訓練や実地経験の違いによるところが大きい。

私が数人の友人と一緒に北京^{ペキン}に行ったとき、夕飯を食べに街中のレストランに入ったことがあった。私たちは誰も中国語ができなかったが、英語が多少通じるだろうと思っていた。しかし、残念ながら、英語もまったく通じなかった。そのとき、一人が紙に漢字を書いて店員に見せたところ、見事に通じた。私はそんなことを思いつきもしなかったので、彼の^④ **機転** におおいに感心した。どうしてそんな機転が^⑤ **キいた**のかと聞いてみたところ、彼は似たような状況を経験したことがあると言った。

思考における臨機応変の能力も、行動におけるそれも、訓練や実地経験によって育まれる。したがって、訓練や実地経験の違いによって、臨機応変の能力にも個人差がある。自分の臨機応変の能力を見誤ると、その場で適切に対処できず、

になる。アジャイルでやる時には、自分の臨機応変の能力を正しく自覚することが重要である。自分には臨機応変に対応する能力があまりないと思えば、アジャイルの部分を減らして、計画の部分を手厚くしなければならぬ。つまりは、臨機応変の能力を正しくわきまえたうえで、^⑤計画とアジャイルのよいバランスをとることが肝心なのである。

(信原幸弘『覚える』と「わかる」 知の仕組みとその可能性』による。なお出題の都合上、本文を一部改めた。)

問一 〓部(a) 〓(c)のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 空欄

X

には「行き詰まってどうにもできなくなる」という意味の語句が入る。あてはまるもの一つ選びなさい。

ア 立ち往生する

イ 立ち返る

ウ 目くじらを立てる

エ 矢面に立つ

オ 水際立つ

問三 〓部①「きわめて効率が悪い」とはどういうことか。最も適当なものを選びなさい。

ア 絶対に失敗しないように計画に従った行動ばかりをしていると、その場の状況に応じてどうするかを決めて修正を加える能力が育たず、行動全体をやり遂げるのが遅くなるということ。

イ 絶対に失敗しないようにすべきだと考えてどれだけ綿密な計画を立てても、事前に全ての状況を想定することはできず、納得がいくまで計画の修正を繰り返すことになるということ。

ウ どのような状況が生じるかが確実にわからないうちに計画を立てても、結局はその場に合わせて新たに計画を立て直すなければならず、かえって時間の無駄が生じてしまうということ。

エ 綿密に立てられた計画はその場の状況に合わせて一部だけを変更することが難しく、万が一想定外の事態が生じた場合には、全てを一からやり直さなければならないということ。

オ 緻密な計画を立てるには、起こりうる様々な状況を想定しなければならぬため膨大な計画が必要であるが、そのほとんどは実際には起こらず、計画の大半が無駄になるということ。

問四 〓部②「そのような病的な恐怖の克服にもつながる」とあるが、人が「そのような病的な恐怖」を「克服」しなければならないのはなぜか。その理由を説明しなさい。

問五 — 部③「臨機応変の能力」とはどういうことか。[A]～[C]に分けた本文の、[B]の範囲から説明しなさい。

問六 — 部④「機転」のここでの意味として最も適当なものを選びなさい。

- ア 計画の全体を見渡して、今必要とされる行動をとつさに選ぶこと。
- イ 過去の経験をふまえて、その場にふさわしい行動をとること。
- ウ 計画の細部にこだわらずに、その場に応じた対応をすること。
- エ トラブルの原因をすばやく見つけ出し、取り除いて解決すること。
- オ おおまかに立てた計画をもとに、相手の立場に立って判断すること。

問七 — 部⑤「計画とアジャイルのよいバランスをとる」際に注意すべきことは何か。最も適当なものを選びなさい。

- ア 様々な状況を想定し、最も成功率の高い計画とアジャイルのバランスを決定すること。
- イ 計画を立てる力が足りないならば、事前に計画を立てずにその場で行動を決めること。
- ウ 個人の能力に見合った適度な計画を立て、あとは状況に応じてその場で対応すること。
- エ 臨機応変の能力が生まれつきの素質か、訓練や実地経験によるものかを自覚すること。
- オ 自分の能力に自信がある場合のみ、一切の計画を立てずにアジャイルでやりきること。

〈このページは白紙です。〉

次の文章は志賀直哉「或る朝」の全文である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題の都合上本文を一部改めている。

祖父の三回忌の法事のある前の晩、信太郎は寢床で小説を読んで居ると、並んで寝て居る祖母が、

「明日坊さんのおいでなさるのは八時半ですぞ」と云った。

暫くした。すると眠っていると思った祖母が又同じ事を云った。彼は今度は返事をしなかった。

「それ迄にすっかり支度をして置くのだから、今晚はもうねたらいいでしょう」

「わかってます」

間もなく祖母は眠って了った。

どれだけか、^(a)夕^(a)つた。信太郎も眠くなった。時計を見た。一時過ぎて居た。彼はランプを消して、寝返りをして、そして夜着の襟に顔を埋めた。

翌朝（明治四十一年正月十三日）信太郎は祖母の声で眼を覚した。

「六時過ぎましたぞ」驚かすまいと耳のわきで静かに云って居る。

「今起きます」と彼は答えた。

「直ぐですぞ」そう云って祖母は部屋を出て行った。彼は帰るように又眠って了った。

又、祖母の声で眼が覚めた。

「直ぐ起きます」彼は気安めに、唸りながら夜着から二の腕まで出して、のびをして見せた。

「このお写真にもお供えるのだから直ぐ起きてお呉れ」

お写真と云うのはその部屋の床の間に掛けてある擦筆画^(*)の肖像で、信太郎が中学の頃習った画学の教師に祖父の亡くなった時、描いて貰ったものである。

黙っている彼を「さあ、直ぐ」と祖母は促した。

「大丈夫、直ぐ起きます。——彼方へ行って下さい。直ぐ起きるから」そう云って彼は今にも起きそうな様子をして見せた。

祖母は再び出て行った。彼は又眠りに沈んで行った。

「さあさあ。どうしたんだっさ」今度は⁽ⁱ⁾角のある声だ。信太郎は折角沈んで行く、未だその底に達しない所を急に呼び返される不愉快から腹を立てた。

「起きると云えば起きますよ」今度は彼も度胸を据えて起きると云う様子もしなかった。

「本当に早くしてお呉れ。もうお膳も皆出てますぞ」

「わきへ来てそうぐずぐず云うから、尚起きられなくなるんだ」

①「あまのじゃく！」祖母は怒って出て行った。信太郎ももう眠くはなくなった。起きてもいいのだが余り起きろ起きろと云われたので実際起きにくくなって居た。彼はボンヤリと床の間の肖像を見ながら、それでももう起しに来るか来るかという不安を感じて居た。起きてやろうかなと思う。然しもう少しと思う。もう少しこうして居て起しに来なかつたら、それに免じて起きてやろう、そう思っている。彼は大きな眼を開いて未だ横になって居た。

いつも彼に負けない寢坊の信三が、今日は早起きをして、隣の部屋で妹の芳子と騒いで居る。

「お手玉、南京玉^(*)、大玉、小玉」とそんな事を一緒に叫んで居る。そして一段声を張り上げて、

「その内大きいのは芳子ちゃんの眼玉」と一人が云うと、一人が「信三さんのあたま」と怒鳴った。二人は何遍も同じ事を繰り返して居た。

又、祖母が入って来た。信太郎は又起きられなくなった。

「もう七時になりましたよ」祖母はこわい顔をして反って叮嚀に云った。信太郎は七時の筈はないと思った。彼は枕の下に滑り込んで居る^(b)懐中時計を出した。そして、

「未だ二十分ある」と云った。

「どうしてこうやくざだか……」祖母は溜息をついた。

「一時にねて、六時半に起きれば五時間半だ。やくざでなくても五時間半じゃあ眠いでしょ」

「宵に何度ねると云っても諸きもしないで……」

② 信太郎は黙つて居た。

「直ぐお起き。(iii) おつつけ福吉町(※3) からも誰か来るだろうし、坊さんもお出でなさる頃だ」

祖母はこんな事を言いながら、自身の寢床をたたみ始めた。祖母は七十三だ。よせばいいのにと信太郎は思っている。

祖母は腰の所に敷く羊の皮をたたんでから、大きい敷蒲団をたたもうとして息をはずませて居る。祖母は信太郎が起きて手伝うだろうと思つて居る。ところが信太郎はその手を食わずに③ 故意に冷かな顔をして横になつたまま見ていた。とうとう祖母は怒り出した。

「不孝者」と云った。

「年寄の云いなり放題になるのが孝行なら、そんな孝行は真つ平だ」彼も負けずと云った。彼はもつと毒々しい事が云いたかつたが、失策つた。文句も長過ぎた。然し祖母をかつとさすにはそれで十二分だった。祖母はたたみかけを其処へほうり出すと、涙を拭きながら、烈しく唐紙(※4)をあげたてして出て行つた。

彼もむつとした。然しもう起しに來まいと思うと樂々と起きる氣になれた。

彼は毎朝のように自身の寢床をたたみ出した。大夜着(※5)から中の夜着、それから小夜着をたたもうとする時、彼は(c)フイに「ええ」と思つて、今祖母が其処にほうつたように自分もその小夜着をほうつた。

彼は枕元に揃えてあつた着物に着かえた。

あしたから一つ旅行をしてやろうかしら。諏訪(※6)へ氷滑りに行つてやろうかしら。諏訪なら、この間三人学生が落ちて死ん

だ。祖母は新聞で聴いている筈だから、自分が行っている間少くも心配するだろう。

押入れの前で帯を締めながらこんな事を考えて居ると、又祖母が入つて来た。祖母はなるべく此方を見ないようにして乱雑にしてある夜具のまわりを廻つて押入れを開けに来た。彼は少しどいてやつた。そして夜具の山に腰を下して足袋を穿いて居た。

祖母は押入れの中用の筆筒から小さい筆を二本出した。五六年前信太郎が伊香保(※7)から買つて来た自然木の(iv)やくざな筆である。

「これでどうだろう」祖母は今迄の事を忘れたような顔を故意として云った。

「何にするんです」信太郎の方は故意と未だ少しむつとして居る。

「坊さんにお塔婆(※8)を書いて頂くのつさ」

「駄目さ。そんな細いんで書けるもんですか。お父さんの方に立派なのがありますよ」

「お祖父さんのも洗つてあつたつが、何処へ入つて了つたか……」そう云いながら祖母はその細い筆を持つて部屋を出て行くとした。

「そんなのを持つて行つたつて駄目ですよ」と彼は云った。

「そうか」祖母は素直にもどつて来た。そして叮嚀にそれを又元の所に仕舞つて出て行つた。

信太郎は急に可笑しくなつた。④ 旅行もやめだと思つた。彼は笑いながら、其処に苦茶々々にしてあつた小夜着を取り上げてたんだ。敷蒲団も。それから祖母のもたたんでいると彼には可笑しい中に何だか泣きたいような氣持が起つて来た。涙が自然に出て来た。物が見えなくなつた。それがポロポロ頬へ落ちて来た。彼は見えない儘に押入れを開けて祖母のも自分のも無闇に押し込んだ。間もなく涙は止つた。彼は胸のすがしさを感じた。

彼は部屋を出た。上の妹と二番目の妹の芳子とが隣の部屋の炬燵にあたつて居た。信三だけ炬燵槽(※9)の上に突つ立つて威張つて居た。信三は彼を見ると急に首根を堅くして天井の一方を見上げて、

「銅像だ」と力んで見せた。上の妹が、

「そう云えば信三は頭が大きいから本当に西郷さんのようだわ」と云った。信三は得意になって、

「偉いな」と臂を張って髭をひねる真似をした。和いだ、然し少し淋しい笑顔をして立つて居た信太郎が、

「西郷隆盛に髭はないよ」と云った。妹二人が、「わーい」とはやした。信三は、

「しまった!」といやにませた口をきいて、櫓を飛び下りると、いきなり一つでんぐり返しをして、おどけた顔を故意と皆の方へ向けて見せた。

《注》

*1 擦筆画……鉛筆、コンテ、チョーク、パステルで描いたうえに、擦筆でぼかしをつけた画。擦筆は、吸い取り紙やなめし革を巻いて筆状にしたもの。

*2 南京玉……陶製やガラス製の小さい玉。糸を通す穴があり、指輪や首飾り、刺繍の材料などにする。ビーズ。

*3 福吉町……現在の東京都港区赤坂二丁目。

*4 唐紙……中国から伝わった紙。ここでは、唐紙を使用した襖を指す。

*5 大夜着……大型で袖のある、厚い綿入れの寝具。

*6 諏訪……長野県の諏訪湖。

*7 伊香保……群馬県の温泉地。

*8 お塔婆……卒塔婆。主に法事の時、供養のためにたてる細長い木片。

*9 炬燵櫓……こたつの、熱源の上に置き蒲団をかける、木製の枠組み。

問一 Ⅱ部(a)Ⅰ(c)のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 Ⅲ部(i)Ⅰ(iv)の本文中での意味として最も適当なものをそれぞれ選びなさい。

ア 悪い

イ 強い

ウ 怒った

エ おそらく

オ じきに

カ 粗末な

問三 Ⅰ部①「あまのじゃく」とは、信太郎のどのような点をいつているのか。説明しなさい。

問四 — 部②「信太郎は黙って居た」とあるが、このときの信太郎の心情として最も適当なものを選びなさい。

- ア 何を言っても説教をする祖母に愛想をつかしている。
- イ 返事をするのが面倒になって再び寝ようとしている。
- ウ 返事をしないことで祖母をあせらせようとしている。
- エ 何度も起こしにくる祖母に我慢の限界を迎えている。
- オ 正論を言われたので言い返すことができないでいる。

問五 — 部③「故意に冷かな顔をして横になったまま見ていた」とあるが、このときの信太郎の心情を説明しなさい。

問六 — 部④「旅行もやめだと思った」とあるが、このとき信太郎は、祖母のどのような行動に対して、どのような気持ちになっているのか。 — 部④までの範囲で説明しなさい。

問七 本文の説明として適当でないものを一つ選びなさい。

- ア 日常の何気ない一場面に、信太郎の心情の変化が細かく表現されている。
- イ けんかをしつつも親しい感情を抱く信太郎と祖母の交流が描かれている。
- ウ 妹や弟が元気に遊んでいる様子によって、家族の明るさを表現している。
- エ 急かされながら起きる朝の風景のゆううつな感じがテーマとなっている。
- オ 祖母が、祖父の法事にきちんと備えようとしている様子が表われている。

問八 次の〈文章〉は、江戸時代から現代にかけての日本の文学の歴史について説明したものである。空欄

1

4 に入る説明として適当なものを選びなさい。

〈文章〉

江戸時代から近代にいたる中で、文学は「何をどう書くか」ということが変わっていった。江戸時代まで物語は、現実世界の

1

しかし明治維新以降、近代になると、現実の世界や人の気持ちをありのままに書く「リアリズム」という西洋の理念が入ってきて、俳句では、

2

。小説では、

3

。戦後になると、文学の書き方はさまざまに変わっていき、例えば、

4

ア 三島由紀夫が『金閣寺』などで、日本の伝統美を美しい文章にこだわって表現した

イ 滝沢馬琴が八犬士たちの戦いを描く壮大な長編である『南総里見八犬伝』を書いた

ウ 松尾芭蕉が奥州・北陸などを旅して、『奥の細道』を書いた

エ 志賀直哉が『和解』など、実体験にもとづいた小説を発表した

オ 紫式部が『源氏物語』を記し、のちの物語作品に影響を与えた

カ 正岡子規が「写生」という考え方にもとづいて創作をした

解答は、いい、いいに書くこと。
記号や句読点も一字に数えること。
※欄には記入しないこと。

受験番号		
氏名		
※		

一

問一
a
b
る
c

問二

問三

※

問四

問五

※

問六

問七

二

問一
a
b
c

問二

ii

iii

iv

※

問三

問四

※

問五

問六

問七

問八

1

2

3

4